

石見銀山の石造アーチ橋を探る（1）

—五百羅漢石造アーチ橋—

高橋 悟

島根県内に確認されている石造アーチ橋はおよそ10橋程度で、非常に少ない。中でも、世界遺産である石見銀山には図-1の様な弓形の石橋いわゆる石造アーチ橋が4橋ある。

図-1 石見銀山の石造アーチ橋



五百羅漢石造アーチ橋



羅漢町石造アーチ橋

それらは、五百羅漢で有名な羅漢寺の五百羅漢が安置されている3つの石窟の前の小川に架けられた3橋、そして羅漢寺近くの羅漢町の銀山川の1橋である。羅漢寺の五百羅漢石造アーチ橋は江戸時代中期の明和元年（1764）、羅漢町石造アーチ橋は明治期とされ、建設の時期が両石造アーチ橋で異なっているが、その多くは石見銀山にあることになる。石造アーチ橋の建設はアーチの技術に長けていないと中々作れないと考えられ、江戸時代は九州地方が主で、ほとんど九州地方を出なかったと言われている。このような中、石造アーチ橋建設の技術がどういう形でここ石見銀山にまで伝わってきたのか、またどのように石造アーチ橋建設が全国に伝わっていったかなどは土木技術者をはじめ石造アーチ橋が存在する地域の人にとってもおおいに興味ある所である。

これらの事から、建設年代が異なるそれぞれの石見銀山の石造アーチ橋の特質を明らかにしていこうとした。そこで、第一段として石造アーチ橋の構造及び作り方、石造アーチ橋の歴史と日本での分布を示しながらそれを基にまず石見銀山において歴史的に古く江戸時代中期に建造された五百羅漢石造アーチ橋の特性について検討した。その過程においてなぜ、江戸時代中期、九州から遠く離れた山陰の片田舎の鉾山町のたった一つの寺の中の橋に石造アーチ橋の様な高度な技術が伝承され、五百羅漢石造アーチ橋として存在するのかなど五百羅漢石造アーチ橋に関わる疑問も浮かび上がってきた。これらの事からさらに①五百羅漢石造アーチ橋はどのようなやり方で架けられたのか、②どのような経緯を得て架けられたのか、③どのような人により架けられたのかなどの視点から検討した。その結果次のようなことが明らかになった。

(1) 五百羅漢石造アーチ橋は九州に多く見られる実用的な石橋と異なり、大名の庭園文化に基づくところの反りの強い太鼓型の半円形をなす橋で、中国式庭園の橋形式のものである。

(2) 五百羅漢石造アーチ橋は中国から直接江戸に入った図-2で示される江戸小石川後楽園円月橋を模範として架けられたものと見られる。円月橋との類似点は多くある中、特に①図-3のように高欄の欄間に雲形文が彫抜かれた独特の形、②図-4のように橋面石が高欄の下から輪石が外に突出しているなどの点においてこの時代の日本国内では見られない円月橋と五百羅漢石造アーチ橋だけに共通する独特のものとする。

図-2 小石川後楽園の円月橋



図－3 欄間に雲形文が彫抜かれた独特の高欄



五百羅漢石造アーチ橋



小石川後樂園円月橋

図－4 高欄下からの輪石のはみだし状況



五百羅漢石造アーチ橋



小石川後樂園円月橋

(3) どのような経過を得て江戸の円月橋の知識が石見銀山まで伝わってきたかと言え、江戸の田安家（第八代将軍吉宗の次男、中納言宗武）→ 江戸靈雲寺の第五世光海上人 → 石見銀山羅漢寺住職月海浄印さらには福光の石工総棟梁坪内平七の間にできた太いパイプにより江戸の円月橋の知識が石見銀山まで伝わってきたものとする。

(4) 五百羅漢石造アーチ橋はどのような人によって架けられたのかと言えば靈雲寺第五世光海上人 → 石見銀山の羅漢寺月海浄印 → 坪内平七石工総棟梁の強くて太いきずな、情報を基に、石工坪内平七を石工総棟梁とした坪内平七一門の福光石工集団により架けられたものと思われる。

なお、内容の細部について興味のある方は現在投稿中の「郷土石見」の内容をご期待ください。